SDGsの担い手を育成する『場』としての学校の物理的・教育的・心理的環境

人文社会科学研究部 高崎文子・教育学研究科 菊池哲平 中迫由実

目的とするSDGsゴール

1．取組･プロジェクトの概要

2023年のSDGs達成のためには，多様な特性を持った人が協働して社会的課題に取り組むことが欠かせない。個人・社会的な意識改革を進めるためには，これまではネガティブにとらえられてきた他者との差異を，肯定的にとらえるような学校教育での経験が大きいと考えられる。このため，どのような学校での環境要因が人々の多様性受容を促進するのかについて明らかにする。

2．取組･プロジェクトの目的

多様な他者への受容性を育成するような学校の環境条件について，物理的環境・教育構成的環境・心理的環境の観点から明らかにすることを目的とした。

3．今年度に実施した取組･プロジェクト

･本年度中のプロジェクトの取組

現役高校生と20～60代の社会人 計1000名を対象に，小中高校時代の物理的・教育環境的・心理的環境と，現在の個人の多様性受容の程度をたずねるWeb調査を実施した。また，現職教員への特別支援教育に対する意識調査と，実際の小中学校の設備の課題についての現地調査も併せて実施した。本報告では，高校生と社会人を対象としたWeb調査を中心に結果を紹介する。

･上記の取組によって生まれた成果（SDGs達成へどのように貢献するのか）

1）多様性受容の世代間比較：
現役高校生・平成生まれの社会人・昭和生まれの社会人の3グループの多様性受容の程度を4観点から比較した結果，高校生は社会人に比べて多様性への忌避感が低く，多様性への理解や個人的受容，社会的支援意識が高いことが示された（図１）。

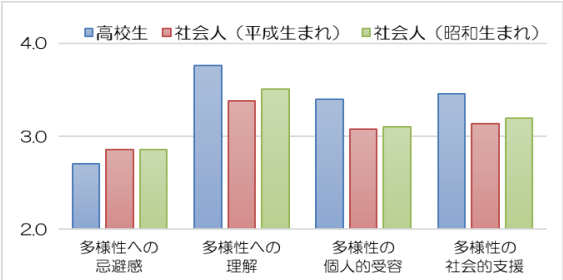

図1.多様性受容の世代間比較

2）多様性受容を促す教育環境：
多様性受容の世代間の差は，小中高校時代に経験した多様な他者との関わり方に起因する可能性があると考え，学校時代の多様な他者（発達障害・外国籍・性別の違和感など7つの多様な特性）との関わり方と現在の多様性受容タイプ（多様性拒絶タイプ・多様性理解タイプ・多様性包摂タイプ）との関連を調べた。

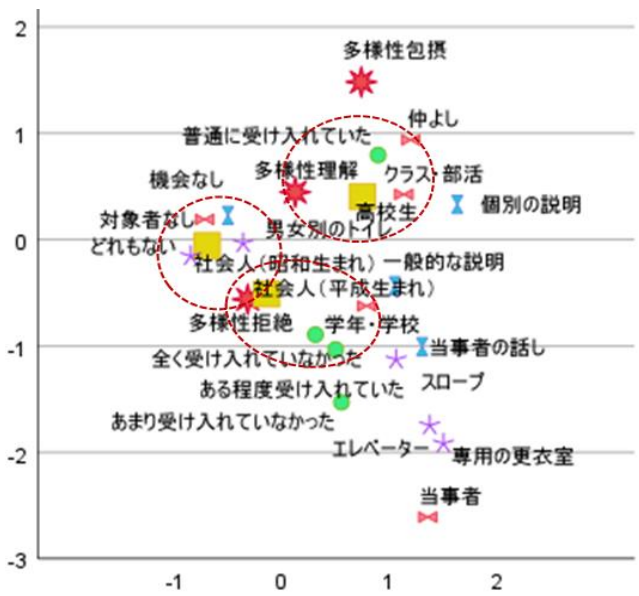

図2. 外国籍の人との経験と多様性タイプの関係

多様な特性のうち外国籍の人に関する経験を取り上げた分析結果（図２）を例に示すと，昭和・平成生まれの社会人の“多様性拒絶”は，そもそも学校時代に外国籍の人との近い関係性の接触経験がなく，周囲も受容的な雰囲気ではなかったことが影響しており，一方高校生は，近い関係性での接触経験や，周囲の受容的環境が“多様性理解”につながっているといえる。外国籍以外の多様な特性についても同様の傾向であった。
個別の多様性について説明するなどの教育的働きかけや物理的な環境要因よりも，まずは個人的な関係性やクラスの多様性への受容的雰囲気といった心理的環境要因から働きかけることが有効だと考えられる。

･今後の展望

今後は個人的な“多様性理解”から一歩進んで社会的な“多様性包摂”への到達を促す要因を明らかにすることが課題となる。